

わかるトルコ政治

編集 / B B I 編集部

「さらばファズィーレット」連載22回

1993年4月のオザル大統領の死後、短命に終わっていたトルコの内閣だったが、今回の第五七代連立内閣は周囲の予想に反して、健闘している。だが今年の2月にトルコを襲った経済危機は、好調に見えた連立内閣の政策を根本から見直さざるを得ない状況に陥れた。改革に踏み切れないトルコの苦痛は続く。

号の経済特集を(参照)
大臣就任後、各党から入党の誘いを受けたデルヴィシユであったが、どこからの誘いにも乗らず、経済担当大臣として中立の立場のまま、政策の実現に向けて活動を開始したが、政治家でないデルヴィシユの政策に、ことごとく

経済大臣デルヴィシユ

二 一年二月一九日月曜日、国家安全保障評議会で起こったエジエヴィット首相とセゼル大統領の衝突を引き金に、ドルが急騰し、トルコを大混乱に追い込んだ「二月危機」から半年余り経った。危機後、急遽、アメリカの世界銀行から呼び寄せられ、経済担当大臣に抜擢されたケマル・デルヴィシユの打ち出した政策は、賛否両論を呼びながらトルコの経済を、なんとか持ちこたえさせた。(詳細は、本誌前

タンタンの辞職

く反対する政治家も登場した。しかし国家の存亡をかけたこの政策に代わる政策もなく、連立内閣は協調政治を強調し、各政党とも党員をなだめる形で何とかデルヴィシユの政策に協力する姿勢を見せた。
デルヴィシユが経済を立て直す為、アメリカを中心に、海外に借金を申し出た際、指摘されたことが、「トルコ政治の不透明さ」であった。「金を貸すのはいいが、この金の行き先を明確にして欲しい」というのが、出資国の言い分であった。もつともない分に、かえす言葉もなく、政治内不正の壊滅政策を掲げて、数々の改革を試みて来たトルコ連立内閣であったが・・・

その政治内不正の壊滅の為に、先頭



辞職後、職場仲間と別れの挨拶をするタンタン(中央)

を切つて指揮をとっていたのが、警視庁出身の内務大臣タンタンであった。六月六日、突然、その彼の辞職ニュースが伝えられた。二月危機から長く検討されていた内閣改革の一環としてか、本人も知らない内に、内務大臣タンタンが、税関担当大臣職に転任させられることになったのである。
これには、「この転任辞令は、個人の基本信念、及び政治理念と一致しな

各党のリーダー達

2001年8月31日現在
DSP+MHP+ANAP 連立内閣



Bülent ECEVİT
ビュレント・エジェヴィット
首相 / DSP党首



DSP / デーセーペー
民主左派党
Demokratik Sol Partisi



Devlet BAHÇELİ
デヴレット・バフチェリ



副首相 / MHP党首
MHP / メーヘーペー
民族主義行動党
Milliyetçi Hareket Partisi



Mesut YILMAZ
メスット・ユルマズ
ANAP党首



ANAP / アナップ
祖国党
Anavatan Partisi



Recai KUTAN
レジャイ・クタン
SP党首 (元FP党)

SP / セーペー
幸福党
Saadet Partisi



Tansu ÇİLLER
タンス・チルレル
DYP党首



DYP / デーイーペー
正道党
Doğru Yol Partisi



Ahmet Necdet SEZER
アフメット・ネジデット・セゼル
第10代共和国大統領
(元憲法裁判長)

い為、新任務からの辞職を決意した。同時にANAPからも離党することを発表する」と述べた。辞職後、彼はどの政党からの誘いも受け付けず、故郷であるアダバザルに隠れこもりしてしまつた。驚いたのは世間である。

これは、今行われたANAP総大会で壇上に登場したタンタンに対する会場の拍手が非常に高かつたこと等、最近あまりに市民にポピュラーになつたタンタンをANAPが疎んじはじめたことが要因と見られているが、ANAP党首ウルマズは、「個人の名声の為に職権を行使する者は、許せない」と述べている。しかし残念ながら、どう考えても、この人事で点を失つたのはウルマズ側である。

四度目の解散

二 一年六月、とうとうファズイーレット党にも強制解散の判決が下された。こうして、エルバカンの築き上げた政党は、MNP、MSP、RPに続いて四度目の解散となつた。

この解散判決の一番の理由は、一般的に「ファズイーレット党が、一九九八年に強制解散させられたレファ党の流れを汲む全く同じ政党である」との見方があるが、判決ではそれよりも

「トルコの政教分離主義を脅かした」ことに起因していると主張している。

この主張の根本となる事件は、現在の第五七代連立内閣の成立した一九九九年四月の総選挙後、国会議員の宣誓式に、ファズイーレット党所属としてイスタンブルから選出されたメルヴェ・カヴァックチュグが、スカーフを巻いたまま国会に出席した事件である。(トルコ共和国では政教分離主義に基づき、公務員の公式の場のスカーフは禁止。詳細は本誌二三号ご参照)

イスラム政党の分裂

トルコに急速な経済成長をもたらしたオザル大統領(ANAP)の死後、大都市を中心に国民の間で貧富の差が広がつた。その後、一九九四年三月、トルコ初の女性首相となつたタンス・チルレル時代、経済危機も迎え、内閣は絶えず揺れ動いた。

こうした混乱の中、エルバカンを党首とするレファ党は一九九五年一二月の選挙で全体の三三・五%と大勝利を得、第一政党となつた。エルバカンは、最初、組閣権を与えられなかったが、ANAPとDYPの連立政権が九日間の短命に終ると、チルレルのDYPと組んで、一九九六年六月、念願の総

理大臣の座に座つた。しかし、一年後の六月、窮地に追い込まれて辞職。

一九九八年一月、レファ党の強制解散にもなつて、エルバカンも五年間政治活動を禁止の身となつた。

ポスト・エルバカン、レファ党若手のホープとして注目されていたイスタンブル市長のタイリップ・エルドアンも、シイルトでの地方演説が、やはり政教分離主義に違反する裁判問題となり、投獄されるまでに至つた。

最も多くの票を持ち、国会に強い影響力を持つていたレファのあとを継ぎ、ファズイーレット党も大きな支持を受けていたが、設立から三年半後までもや強制解散となつた。

行く手行く手を阻まれて、遠回りをしたエルバカンだが、時の恩赦によつて思つたより早く、罪を許されそうに見えるもつき、活動を開始。しかし、今まで一つであつた巨大政党は、時代

の流れを受けて、エルバカンとクタンの流れを受けて、エルバカンとクタンを中心とする伝統保守派と、刑期を終えて、出所したエルドアンを中心とする若手新改革派の二派に分裂してしまつた。こうした事態を何度も経験済みの彼らは、ファズイーレット党の解散

判決を予期し、早速新政党の準備にとりかかつたが、もはや一つの政党としてではなく、クタンは、サアデット(Saadet)幸福)党、エルドアンは、アク(Aktan ve Kalkinma)公正進歩)党と道は二つに分かれた。

さらにメディアは、エルバカンの強敵と見られるエルドアンの個人資産がイスタンブル市長時代の不正によるものだとする汚職容疑や、政治活動禁止がまだ解かれていないことを理由にエルドアンを批判し、イスラム教を掲げて新しい支持層を広げつつあるエルドアンの勢力拡大を牽制している。

共和国建国以来、強行に政教分離を守るとうとするトルコで、現在の内閣自身、右派と左派の連立内閣であることは、二一世紀がもはやイデオロギーの時代ではないことを物語つている。

(二) 一年八月三二日現在)



<上写真> 保守派の陰の実力者エルバカン(左)と元ファズイーレット党の党首クタン(右)



新改革派のカリスマ的リーダーエルドアンと「電球党」と呼ばれてしまったアク党のマーク